

景観心理学への進化論的・現象学的アプローチ-環境心理学ノート-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学情報コミュニケーション学研究所 公開日: 2016-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 恒夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/17886

景観心理学への進化論的・現象学的アプローチ — 環境心理学ノート —

渡辺 恒夫¹

Evolutionary approach and phenomenological approach to the psychology of landscapes: A research note for environmental psychology

by Tsuneo WATANABE

良い景観とは何かという景観心理学の根本的な問いに対する、進化論的と現象学的という二つのアプローチの意義を明らかにしたい。第一に、景観研究がその一部に他ならない環境科学自体にとって、これらのアプローチは意義がある。なぜなら、環境とは幾何学的物理学的時空間ではなく主体としての私たちへ立ち現れる現象だからであり、また、この環境という現象は、生物としての私たち人類の進化過程ですでに価値を負荷されているからである。第二に、アップルトンの「眺望—隠れ場」理論やカプラン夫妻の「好みのマトリックス」を始めとする進化心理学的諸研究は、自然景観だけでなく都市景観の美的研究としても、意義と生産性が認められている。第三に、特に歴史的都市景観に関して、志向性という概念を備える現象学は、進化的アプローチに対する相互補完的アプローチになりうる。二つのアプローチの関係性に関して、方法論的考察が最後になされた。

I try to clarify the significance of two approaches, evolutionary and phenomenological, to the psychology of landscape. First, they are significant for environmental science itself, because our environment is neither a physical nor a geometrical space-time, but a phenomenon which appears for us, and also because our environment as a phenomenon has already been value-laden in the evolutionary course of our humankind. Second, main evolutionary-oriented psychological theories, such as Appleton's "prospect-refuge theory" and "matrix of preference" of Kaplans, are meaningful and productive hypotheses in the domain of esthetics of not only natural landscape but also urban one. Third, especially in the study of historical urban landscapes, phenomenology, with the concept of intentionality, is a suggestive approach which is complementary to evolutionary one. The relationship between these two approaches was discussed lastly.

キーワード: 環境科学, アップルトンの「眺望—隠れ場」理論, 景観の好みのマトリックス, 都市景観, 志向性

Keywords: environmental science, Appleton's "prospect-refuge theory", "matrix of preference" in landscapes, urban landscape, intentionality

序 美しい景色はなぜ美しいのか

他の景観と比べて「良い」「魅力的」と思われるのはなぜだろうか。

問われれば少なからぬ人々が、「それは趣味の問題だ」といった答を返してくるだろう。著者が

美しい景色はなぜ美しいのか。あるいは「美しい」という語が大げさだというなら、ある景観が

ある大学で毎年行っている「美しい景観はなぜ美

1 明治大学情報コミュニケーション学部兼任講師

本研究ノートは、情報コミュニケーション学部紀要編集委員会により指名された複数の匿名レフェリーの査読を経たものである。This paper was duly reviewed and accepted by the anonymous referees who were appointed by the editorial committee of the School of Information and Communication.

しいのか」と題した講義でも、「好みの問題だと思っていたからそんなこと考えてもみなかった」といった感想が、少なからず見られる²。伝統的な街並みの中に高層マンションを建築するような場合でのいわゆる景観論争に参加してくる専門家の中でも、そのような立場は少なくない。たまたま眼に付いた中でも、ある倫理学者は（安彦，2004）、形や運動が第一性質（客観的性質）であり、色や匂いが第二性質（人間である限り共通な、間主観的性質）であるのに対し、良し悪しや美醜は第三性質（人によって違う主観的性質）であるといい、「景観についても、……たんなる好き・嫌いの問題として処理したほうがいいのではないのか」（p.225）という。また建築家の中にも、2004年にいわゆる景観法が施行された前後の日本の醜い景観を摘発する動きに水を差すように、悪い景観や醜い景観でなくて自分が嫌いな景観というべきだといった趣旨の発言がみられる³。

ところが筆者は以前から、美醜や好悪の感情には、個人的な好みにとどまらない何かしら深い意味があるのではないかと思っていた。たとえば犬猫だけでなくネズミや牛馬の仔にいたるまで、哺乳類の仔を私たちが「可愛い」と感じてしまうのはなぜだろう。人間性に普遍的どころか、哺乳類にも普遍的な生物学的基盤まで、想定したくなるではないか（「可愛い」の代りにお望みなら「保護的行動を解発する」と言ってもいいが）。さらにいえば、花はなぜ美しいのだろうか。蝶や蜂との共通の生物学的基盤、より正確には人類の祖先が蝶や蜂と共に花々（やその果実）の恵みを受けて来た生態系の長い進化の歴史、というものを想定しなければ、答えようがないのではないか。

すでに「進化」という言葉を出したが、本稿の

第一の目的は、美しい景色はなぜ美しいかという、景観の心理学における根本の問いに対し、進化心理学的に接近しようとするものである。すでに環境美学・環境心理学において、自然景観の魅力に関する有力な進化心理学的アプローチが現れているので、第2章と第3章をその紹介に当てることになる。都市景観に関しては、都市の歴史が進化を云々するには短すぎるというもっともな理由で、進化論的アプローチは表立ってはいないように見える。けれども、自然景観についての進化論的仮説をふまえれば都市景観についても仮説を提起できるというのが本稿の主張の眼目であり、これには第4章が当てられることになる。

本稿の第二のテーマは方法論に関するものである。進化心理学は「究極因」としての仮説を提起するものであって、次章以下を先取りして例に出せば、「人類の祖先の中で、あるタイプの景観を好んだ個体はそうでない個体に比べて適応度を上げ、それゆえに私たちは前者の子孫としてその景観への好みを受け継いでいる」といったものになる。このような、直接検証しがたい進化心理学説から導き出されたより具体的個別的な仮説を検証するための方法としては、2～3章で概観するように、美術史的考察から始まって調査統計、生理心理学的方法と様々である。本稿ではそれらの方法の中で、現象学的方法に焦点を当てる。景色の善し悪しといった主観的な現象を扱うのには、「体験」の学、生きられる経験の学である現象学的方法こそが、色々な人間科学の方法の中で最も対象適合的な方法であると思われるからである。したがって第5章では、一見して水と油のような進化心理学と現象学が、いかにして景観の心理学という分野で収斂しあうかについて論じることにな

2 後述の環境心理学者 Kaplan & Kaplan (1989) も、「人の趣味には理由などない」「美はあなたの眼の中にある」（p.40）といった反応を想定した上で論を進めている。

3 たとえば、五十嵐(2006)。

る。

なお本稿は、景観研究とは環境心理学的研究の一部であり、したがって環境科学の課題の一つを成すという立場に立つ。それゆえ第1章として、「科学」として環境科学がどのような特徴を持つか、そしてその中で環境心理学が、景観研究を含めてどのような位置を占めるかについて概観し、景観研究への進化心理学的・現象学的アプローチが、環境科学の方法論として必然性を持つことを、最初に明らかにしておきたい⁴。

1 環境科学の中の環境心理学

環境心理学は環境科学の一部であるが、環境化学や環境生物学などに比べれば歴史も浅く、一般にもまた環境科学の内部でさえも、十分に認知されているとは言い難い。その理由の一つとして筆者は、「環境」という概念に対して広くみられる誤解をあげる。「地球」や「都市」が物理的に実在するという意味では、「地球環境」も「都市環境」も物理的に実在するということができない。それら環境は、地球上や都市の内部に「棲む主体」に対して立ち現れる「現象」なのである⁵。主体に対して現れる現象である以上、現象の背後に想定される客観的世界を分析的方法で価値中立的に探究する近代科学のパラダイムを、環境科学がそのまま継承するわけにはいかないのは自明の理なのだ。

筆者はかつて（渡辺，2009），近代科学と環境科学を対照させ、客観性 vs. 主観性、分析 vs. 総合、価値中立 vs. 価値指向という科学認識論上の三つ

の対立軸を抽出し、各対立軸の左側に近代科学が位置づけられるのに対し、今日、環境問題に対処すべく環境科学は、右側へと展開しつつあるとした（表1）。

表1 近代科学と環境科学の対立軸（渡辺, 2009 に基づき作成）

<近代科学>	<環境科学>
客観性	主観性
分析	総合
価値中立	価値指向

しかもこれら右側の三項、「主観性」「総合」「価値指向」は、互いに切り離すことができない。「騒音」という比較的身近な環境問題を例にとっても（たとえば Bell, et. al, 2001, p. 152ff 参照）、音圧やピッチや持続時間といった物理的に特定可能な個別の変数を取り出してコントロールし、実験するという、伝統的な実験科学で用いられてきた分析的方法は的外れだろう。予測しがたさやコントロール不可能性といった、主体の側の変数が関わっていることは、自分で弾くピアノの音は騒音でないのに隣家の微かなピアノの音がしばしば騒音となることから頷けよう。それに加えて、自分が受験勉強中であつたり、隣家との関係の善し悪しも関わっているとすれば、もはや主体の側の変数といっても個別的に取り出すことは難しくなる。「やかましさ」とは、主体に対して現象する全体的で不可分な「意味」なのである。しかも、「やかましさ」とはいうまでもなく価値的な語であり、そのように、主体に対して現象する環境は、常に良いか悪いかを始めとする様々な「価値」を、

4 本稿は具体的な研究計画の実施に至る以前の萌芽段階のものなので、副題に「ノート」の語を添えた。また、本稿の内容は、東邦大学理学部と明治大学情報コミュニケーション学部での「環境心理学」講義経験に依るところが大きい。多数の示唆的な反応を返していただいた受講生の諸君に感謝したい。

5 生物学者フォン・ユクスキュルは、このことを最初に明確に指摘した人であった。「いずれの主体も主観的現実だけが存在する世界に生きており、環世界 (Umwelt) 自体が主観的現実にはかならない」（ユクスキュル，クリサード，2005, p. 143）。

主体に対して担っているのである。

このような、「主体に対する現象」であって「不可分の全体」であり常に「価値を担う」という環境についての科学的研究としては、環境心理学は周縁などでなく中心に位置しなければならないであろう。ただし、環境「心理学」だからといって既存の心理学の方法をそのまま環境研究に適用すればよい、というわけではない。刺戟と反応の連合によって人間行動の法則的説明をめざす行動主義も、人間を情報処理マシンとみなす認知主義も、客観性・分析的方法・価値中立という「近代科学」のパラダイムを共有している以上、環境心理学の方法としては適切とはいえない。「主体に対する現象」を「不可分の全体」として扱う方法としては、その名の通りの現象学こそが呼び求められなければならない。

次に、環境科学が価値指向の科学であり、環境保護を目的として登場してきたというところ⁶、進化論的パラダイムとの関連を見取ることができる。進化心理学が示唆するところでは、私たちの心のあらゆる適応性は、200万年前—1万年前という、長い石器時代の中の進化的適応環境 (Environment of our Evolutionary Adaptation: EEA) の産物であると考えられる。それゆえ、1万年前に始まる農耕文明、5000年前に始まる都市文明、まして200年前に始まる産業文明や50年前に始まる情報化文明には適応しているとは考えにくい。だから、私たちが現に生きている環境と進化的適応環境のズレが、さまざまな社会問題（戦争、交通問題、精神障害を含む健康問題、犯罪、学校教育の崩壊、等など）を生み出していると考えられることになる（たとえば、カートライト, 2005, p. 104ff）。そして社会問題

の中には、自然環境の破壊が汚染物質や地球温暖化などによって人類と他の動植物の生存を物理的に脅かしているだけではなく、私たちの精神へもネガティブな効果をもたらすという可能性も、入れられよう。自然環境とは初期人類が、他の動植物と生態系を形成しつつ、長い進化的適応環境を通じて人間性を育ててきた場所である以上、その破壊は何らかの意味で人間性に影響を与えずにはいないだろうから。

無論、このような極めて抽象度が高い仮説を、そのまま検証するには著しい困難が伴う。「人間性」の定義一つとっても、定義は難しく思われる。にも関わらず、進化論的アプローチは発展し続けている。たとえば進化理論の影響を受けた人類学者ブラウン (2002) は、人間の普遍的特性について50項目以上を挙げたうえ、「人類学はこれまで、人間の普遍的特性の構造を解明するという課題に手を染めてこなかった。今、その課題に取り組むべき時が来ている」(p.251) と断言する。また、本稿のテーマにより近いものとして、進化心理学者バス (Buss, 1995) が原始の環境の中でヒトに備わったとしている心理学的機構の10のリストも、参考になる。たとえば第一の「ヘビへの恐怖」は、ほとんどの恐怖症は初期人類にとって有害であったものに関連していると一般化できるが、現代社会で危険なもの（銃、ナイフ、自動車、電気のコンセントなど）とまったくズレているところに、戦争や交通問題や犯罪の淵源を見取ることができる。そしてリストの7番目には、「サバンナに似た景色への好み」が「資源と保護場所を提供するような生息地を選択するよう促す」(p. 6) 機能を持つものとして、挙げられている（しかもそこで典拠としてあげられているのは、後述

6 たとえば, Cunningham, & Cunningham (2004) の冒頭の次の一節。「環境科学はまた、使命指向の (mission-oriented) 科学である。すなわち、環境科学は、私たち自身が作り出したこの環境問題に私たちすべてがかかわり、何ごとかを試みる責任があるということを示唆するのである。」(p.3)

のカプラン論文 (Kaplan, 1992) である)。

このように「人間性」により具体的な規定を与え、個別的な進化心理学的仮説を導くことで、具体的な研究を促進することができよう。次章以下では、本稿のそもそものテーマである景観の好みに関する諸研究を検討することによって、その環境心理学としての、そしてまた環境科学としての意義を明らかにしてゆこう。

まず、自然環境の破壊が精神的なネガティブ効果をもたらしうる、というためには、景観研究の立場からは、そもそも自然景観が都市景観に比べて、精神的によりポジティブな効果をもたらすか、ということが示されねばならない。これは第2章であつかう⁷。次に第3章では、どのような景観が好まれるかについての、アップルトンのサバンナ仮説に基づいた「眺望—隠れ場」理論や、カプランらの好みのマトリックスが紹介される。第4章では、本来が進化的適応環境ではない筈の都市景観もまた、上記の好まれる景観の特徴の共有がみられ、それが伝統的都市の魅力となっていることを示す。第5章では、モダニズム建築勃興以来の伝統的都市景観の破壊に対して、現象学が進化心理学とあい携えて自然と伝統とに調和的な景観を、そして私たちの生息場所を、維持し創出するためのパラダイムとなりうることを示す。

2 自然の回復的効果

自然景観が都市景観に比べ精神的にもポジティブな効果をもたらすことを如実に示すのが、いわゆる自然の癒し効果である。これは環境心理学においては自然の回復的効果と呼ばれているが、最もインパクトを与えたのは、アルリッチによる窓から木立の見える病室の方が壁しか見えない病室よりも入院患者の手術後の回復が早い、という調査結果だった (Ulrich, 1983a)。この結果は、ガラス窓を隔てた風景である以上、大気成分の薬理作用や運動生理学によってではなく、視聴覚映像の効果として心理学的に説明されなければならない。事実、これ以後、各種の自然風景や都会の風景のビデオ画像等を刺戟とし、脈拍や皮膚電気伝導度水準など生理学的指標を用いて自然のストレス緩和効果を測定するという実験的研究パラダイムが、発展することになる (Ulrich, et al. 1991, 参照)⁸。

この自然の回復効果の心理学的説明として有力であり後述のように本稿のテーマにも関連してくるのは、自然との触れ合いが注意力という「精神的資源」(psychological resources)の再配分を促進するという、カプランの注意力回復理論である (Kaplan, 1995, p. 177f)。精神疲労を齎すのは

7 自然破壊の精神へのネガティブな効果をより直接的に示すと思われる研究として、自然に恵まれた地域の子どもとそうでない地域の子どもとで、パーソナリティ上の諸性質や注意欠陥障害の程度がどれくらい異なるかを明らかにしようとした一群の調査研究があり、方法論上の困難にも関わらず一定の有意な結果を出しているのは興味深い (Flouri, et al., 2014 所載の文献表など参照)。本稿は景観にテーマを絞っているので割愛せざるをえなかった。

8 アルリッチらの研究へ最近の評価としては、de Kort et al. (2006) 参照。なお、このタイプの研究の具体例として参考までに、筆者の研究室での実験的研究を挙げておく (Watanabe, et al., 2008)。ストレス刺戟の後、8分間自然環境ビデオを視聴する自然条件と、同時間都市環境ビデオを視聴する都市条件とで、生理的指標の変化を測定し、どのような変化の違いが現れるかの実験である。生理的指標としては、刺戟映像の好-悪の指標として心拍率の低-高を、刺戟映像に直面しての覚醒水準の高-低の指標として、皮膚電気伝導度水準の高-低を用いた。次にこれを、好き嫌いをX軸とし、覚醒水準をY軸として、「好-高覚醒」の象限を「エキサイティング」、「好-低覚醒」を「リラックス」、「嫌-低覚醒」を「退屈」、「嫌-高覚醒」を「ストレス」というように、4象限に分類するラッセルの「場所の気分特性モデル」に対応させ、実験結果を解釈した。測定実験の結果をラッセルの場所の気分特性モデル上に生理的指標の軌跡としてプロットしたところ、自然条件での生理的指標の軌跡が「リラックス」の象限内を変化したのに対し、都市条件でのそれは「退屈」の象限内を変化した。この結果は、「ストレスフルなデスクワークの後、事務室の窓越しに外を8分間眺めると、自然景観がある場合はリラックスし、都市景観がある場合は退屈する」という事態を意味すると解釈された。

注意の持続的集中であり、夜遅くまで仕事をする
と疲れているのに眠れなくなる等、休息のみでは
注意力の偏りから回復できない。魅力的な自然景
観は、おのずと注意が引き寄せられ、しかも注意
の対象は全体に分散するので、精神作業によって
一極集中した注意力資源の再配分を促し、これが
回復効果となる。このような自然景観の特徴をカ
プランは「魅了」(fascination)と名づけている
(p.172)。

なぜ自然景観が都市景観よりも魅了という特
徴を備え、回復効果を示すか、そもそもなぜ自
然景観の方が好まれるかは、自然環境が進化的
適応環境に属するが都市環境はそうではない、と
いうところに求めることができよう(たとえば、
Ullrich, 1983b)。そこで次に、自然景観なら等し
く好まれ、魅了という性質を備えて回復効果を示
すのか、それとも自然景観にも特に好まれる特徴、
好まれない特徴が、文化を超えて存在するのか、
という問題が立てられる⁹。

3 どのような景観が好まれるか

すでにサバンナ仮説に基づく景観の好みについ
て触れたが、より具体的には、地理学者のアップ
ルトン(2005)が、主に動物行動学の知見を
参照して「眺望—隠れ場理論(prospect-refuge
theory)」(p.94ff)を提起しているのが注目され
る。サバンナとは初期人類にとって、狩猟の対象
となる獲物が豊富に見出されると同時に、脅威
となる肉食獣も生息している場所である。そこ
で、自分は姿を見られずに相手を先に見つけるこ
とができるような、眺望が効く隠れ場が重要とな

る。つまり、生い茂った灌木の陰から草原を眺望
するような場所である。そのような場所を好んだ
初期人類の集団の中の個体は、そうでない個体に
比べて適応度を上げ、結果として我々はその子孫
となって「眺望—隠れ場」的景観への好みを受け
継いでいるのである。たとえば、17世紀に出現
した西洋絵画史上最初の風景画家集団によって描
かれ、その後の風景画の範例となった作品には、
典型的な眺望—隠れ場的な構図が現れているとい
う。

アップルトンは動物行動学の知見や美術史上の
風景画の分析を手がかりに議論を進めるが、環境
心理学としてはより実証的な証拠が欲しいところ
である。写真など映像を用いて景観の好みを統計
学的に明らかにする研究の流れのなかで、サバン
ナ仮説もまた、取り上げられているが、実験参加
者に親しい植生の風景と水辺の風景が好まれると
いう結果が多く、特にサバンナが好まれるという
結果は出ていない(Hartmann, P.& Apaolaza-
Ibáñez, V., 2010 参照)。中で注目されるのは
Balling & Falk (1982)の研究である。熱帯雨林、
温帯落葉樹林、針葉樹林、サバンナ、沙漠の5種
類の植生スライドを提示し、色々な年齢層の実験
参加者に好みを判定して貰ったところ、参加者の
出身地域に近い植生である落葉樹林と針葉樹林が
サバンナと同じくらい最も好まれる結果となった
が、参加者の年齢別では小学生の子どもの群だけ
がサバンナを最も好むという有意な結果が得られ
た。発達初期には生得的なプログラムが作動して
いるが、経験を積むにつれて環境の影響が強くな
るという発達パターンが、想定できるのである¹⁰。
景観の好みについての研究での最もめざましい成

9 なお、簡略にすぎない本節の記述を補う最近の総説として、Scopelliti et. al (2011)を挙げておきたい。

10 初期人類の進化的適応環境の影響が子どもに強く発現することを示唆する結果は、他の分野でも得られている。R. L. Van de Castle(1970)の夢内容についての調査によると、動物が出現する夢の割合は4歳で60%に達するのに、年齢とともに低下し、大学生では10%にとどまる。しかも大学生ではペットや家畜の夢が多いのに比べ、低年齢の子どもの夢には野生動物が多いのである(Revonsuo(2000)による引用)。Revonsuo論文の、この調査を含む夢の内容分析全般に対する精緻な進化論的考察も参考になる。

果は、カプランらの、「好みのマトリックス」であろう（表2）。その目標は、景観の好みの心理学的変数を明らかにし、かつ進化論的に説明するというものである。私たちは、先史時代において「生き残り」(survival) に有利であったような環境を示唆する景観を好むと想定されるのである (Kaplan & Kaplan, 1989, p. 41)¹¹。その方法は、多数の実験参加者にいろいろな場所の画像を見せて評定させ、統計的に処理して好みの変数を抽出するという、より実証的でテクニカルなものである。その結果見出された4つの好みの変数を、情報の種類によって二次元的に配置すると、表2のような「好みのマトリックス」にまとめられたという。

表2 好みのマトリックス。Kaplan & Kaplan, (1989, p. 53ff), カプランら (2009, p. 10ff), の表と記述を基に著者が作成した。なお、表の説明として Stamps (2004) の次のまとめが最適と思われるので、引用しておく。「この理論は、人々には環境の中で、理解したいか探索したいかという二つの根源的な要求があると想定する。さらに、これらの要求は、直接知覚されるものか、移動した場合に知覚される可能性のあるものに、関わっている」(p. 1)。

情報形態の種類	Understanding (理解)	Exploration (探索)
Immediate (二次元的)	Coherence (まとまり) : 秩序と調和を保っている程度。統合性の程度が高いほどその風景への好みは強くなる。	Complexity (複雑さ) : 一つの風景にある要素の数と多様性。(少なくとも自然の景色では) 複雑性があればあるほど好みは強くなる。

Inferred or Predicted (二次元的)	Legibility (わかりやすさ) : その風景の内容を理解し分類することを可能にする明瞭性の程度。明瞭さがあればあるほど好みは強くなる。	Mystery (ミステリー) : それを見つけようとしてその風景に惹きつけられるような隠された情報がある風景が含まれている程度 (例えば地平線で視界から消えるような曲がった道路)。ミステリー性があればあるほど好みは強くなる。
------------------------------	---	---

このカプランらの理論に基づき、同様に画像刺激を用いた多数の実証的研究が行われている (Stamps, 2004 参照)。これらの研究では、純粹の自然景観にとどまらず、何らかの建物を含む人工景観画像も用いられ、同様の好みのマトリックスがある程度示されている。たとえば、日本での研究例である Ikemi (2005) では、建物の両側が木立で隠されている画像の方が、木立と建物との間に間隙がみられる画像よりも好まれることが示され、これを「ミステリー」の効果として解釈している。

この、好みのマトリックス理論と前述の注意力回復理論の関係は、「魅了は、複雑さ、まとめり、分かりやすさ、そしていくぶんかのミステリーを備える刺激によって惹起される」(de Kort, et.al, 2006, p. 310) とまとめられる。ただし、回復効果としてはこのマトリックスは必要条件の一つであっても十分とは言えず、画像提示実験では十分に示されない要因として、日常生活からの離脱 (being away) やひろがり (extent) が効果を強めるという (Kaplan, 1995。また de Kort, et.al, 2006 も参照)。また、ひろがりとは単に空間的な広さを意味するのではなく時間的なひろがりをも

11 カプランらの研究の進化心理学的意義については、進化心理学のマニフェストである Barknow, Kosmides, & Tooby (1992) 収録の Kaplan (1992) も参照のこと。

意味する。「ひろがりはまた、より概念的な水準でも作用する。たとえば、歴史的建造物を含む背景は、過去の時代、過去の環境へと、それゆえより広大な世界へと繋がっているという感覚を促進する」(Kaplan, 1995, p. 174)。この最後の知見は、次の都市景観の心理学にとって極めて重要である。

4 都市景観：伝統的都市の魅力の理由

2章では自然景観は都市景観に比べて癒しの効果があることを示す研究を、3章では景観の好みについての説として、サバンナ仮説に基づくアップルトンの「眺望—隠れ場」理論と、カプランらの好みのマトリックスに基づく「魅了」の理論を紹介して来た。これらの諸研究は、景観の好みもまた長い石器時代の進化的適応環境の産物であることを示唆していると思われた。するとただちに、たかだか5000年前に始まる都市が進化的適応環境ではないのであれば、二十世紀前半に有力だったハワードの田園都市やル・コルビュジェの太陽と緑の都市のように、出来る限り緑を増やす位しか私たちにできることはないのか、という疑問が起こるだろう¹²。

これに対して筆者は、ある仮説をもって答えた。それは「長い間都市に住み続けている間に、人類は、都市の景観構造を、無意識のうちに、進化的適応環境に由来する景観の好みに近づけて形作ってきた。それが、伝統的都市景観に私たちが安らぎを覚える理由である」というものである。環境心理学への現象学的アプローチを提唱している Seamon(1982)も「少なくとも伝統的諸社会のもしくは土着の建築術においては、人々がしばしば、人工的環境を生活世界の必要が充たされる限

りで自然背景に調和するよう無自覚のうちに作りあげているという、強い経験的証拠が存在する」(p.131)と指摘する。本稿ではさらに一步を進め、自然背景との調和とは別に都市景観そのものの構造にも、3章での進化心理学説を裏書きするような「証拠」が見出せることを、美術史家佐野(2008)の著作を元に指摘したい。

佐野の著作では広場の魅力についてこう述べられている。「広場は空気、空間の造形である。空気をいかに感じさせるかが問題である。広い大通りの先にある小さい広場では空間は目立たない。ローマの多くの広場は、細い、暗い小路を突如、ある大きさをもった明るい広場に出る。そのドラマティックな構成におどろきと開放感があるものが多い。……ヴァチカンのサン・ピエトロ広場に大通りが開通する以前の、古い小路から突如、ある大きさをもった明るい広場に出る。そのドラマティックな構成におどろきと開放感があるものが多い。……ヴァチカンのサン・ピエトロ広場に大通りが開通する以前の、古い小路から突如、ある大きさをもった明るい広場に出る。そのドラマティックな構成におどろきと開放感があるものが多い。」(p.74)。

この記述中、「細い、暗い小路を突如、ある大きさをもった明るい広場に出る」ことで連想されるのは、初期人類が、灌木を抜けて突如サバンナの開けるのに直面した時の感動である。細く暗い小道は「隠れ場」で広場は「眺望」であり、アップルトンの「眺望—隠れ場」理論によつて、魅力的な景観の例解になっていると考えられないだろうか。「サン・ピエトロ広場に大通りが開通する」ことによつて魅力が減じたとしたらそれは、通りが隠れ場の用をなさなくなったからであろう。

また、「丘の上の町の歴史と形態、迷宮性と明晰性」(p.16)と題した節では、中部から南にかけてのイタリアの丘の上の町の魅力が、「迷宮性」と「明晰性」の二語によつて語り尽くされている。

12 ハワードやル・コルビュジェなどモダニズムと称される都市計画の問題点については、レルフ(1999)、松永(2005)等を参照。

迷宮性とは街路が細く入り組んでいるからであるが、にもかかわらず明晰なのは、街並全体が山腹の斜面にあるため、どこにいても自分の位置が一目瞭然で、迷子になる心配がないからである。ここで、「迷宮性」がカプランらの好みのマトリックス（表2）でいう「ミステリー」に、「明晰性」が「分かりやすさ」に対応することに気づかないではいられない。表2では、ミステリーと分かりやすさは「三次元的」の行に配置されているが、自然風景がしばしば富士山のように眺めるだけで（つまり二次元的に）享受されるのに対し、都市の景観はそこに足を踏み入れることによって（主として三次元的に）享受されることを思えば、迷宮性と明晰性とは、いよいよもってカプラン理論の都市景観における例解とみなされ得よう。無論、この本は、あくまで著者の美術史家というエキスパートとしての眼によって描写がなされ、進化理論はもとより、景観心理学の影響を窺わせるものは一切感じられない。だからこそ、中世以来の伝統を誇るヨーロッパの都市の魅力に対する、この本でのエキスパート評価と進化心理学的理論の、期せずしての収斂が、前述の、伝統的都市の景観構造は進化的適応環境に由来する景観の好みに近づけて無意識裡に形作られているという仮説に、信憑性を与えていると思われるのである。

次に、より直接的に伝統的都市の景観構造の魅力の解明を試みた研究を検討してみよう。ここで取り上げるのは、アメリカ南部の南北戦争以前に遡る歴史的街並を残したチャールストンの旧市街と、その郊外にそれを模して15年前に建設されたニューアーバニズムの街、l'Onの景観の、比較現象学的研究である（Wells, J. C., Baldwin, E., 2012）。ニューアーバニズムとは、20世紀前半から中盤のモダニズム、後半のポストモダニズムの後を受け、1980年代ごろから盛んになった都市計画の新潮流で、車でしか行けないようなな

だっ広い郊外分譲地型・ニュータウン型の都市開発を否定し、駅を中心として密集する歩行者中心の旧市街の再現を目指すものだという（松永, 2005を参照）。方法としては、旧市街（以下、「チャールストン」と略称）とl'Onの住民からの研究参加者にカメラを渡し、各自お気に入りの風景を撮影して貰いそれについて語って貰うという、自己の視点、一人称的な視点による現象学的方法を取る。お気に入りの風景としては、泉水、いわくありげな門扉、バルコニー、チャールストンのレンガ建ての建物の間隙の「ひそやかな秘密の場所」「l'Onにある秘密の中庭」（共にp.394）、「空想を誘うチャールストンの馬車繋ぎ」（p.396）などが例示されていて「それゆえ、チャールストンとl'Onの諸風景は、様々な種類の秘密の、思いがけない、ミステリアスな場所を隠していて、謎の感覚と探索したいという欲求を促すのである」（p.394）とまとめられている。これらはまさに、カプランらの好みのマトリックスにおける「ミステリー」の要素であり、また、「秘密の場所」「秘密の中庭」は、アップルトンの眺望―隠れ場理論の例解でもある。これらの要素が、チャールストンとl'Onに共通して見られたことは、ニューアーバニズムが伝統的都市の魅力の再現に成功したことを示唆してもいるだろう。

けれども、チャールストン旧市街にあってl'Onにないものがある。それが、「想定上の過去についての空想という想像力を触媒する場所の機能」（p.395）であり、「タイムマシン機能」（p.396）である。ある研究参加者が語ったように、「この階段はチャールストンでの南軍の兵士たちの物語を誘発する」（p.397）のである。このように過去への時間的ひろがりも、前章で紹介したカプランらの理論によれば歴史的街並みの魅力を増す。

カプランらは（Kaplan & Kaplan, 1989）、歴史的建造物が過去への繋がり感覚を増加させるこ

とを、ひろがり「見られたことと同様想像されたことをも含んで」(p. 190)より概念的な水準でも作用することとして認知的に説明するが、Wells & Baldwin (2012)のアプローチは現象学的である。直接経験したわけでもない想定上の過去が、はるか昔の南北戦争での兵士たちの物語が、よみがえるとはいかなる事態か。この論文ではそれを、現象学者メルロー・ポンティ(1982)の著作に基づき、「決して現在であったことのない過去」(Wells & Baldwin, 2012, p.386)が、つまり一度も自分自身で現在のこととして経験したことのない想像上の過去が、よみがえることとする。歴史的遺産を保存することの意味は、まさにここにある。

5 景観心理学への現象学的アプローチ

前章では、伝統的都市の景観が好まれるのは、進化的適応環境に由来する景観の好みに近づけて無意識裏に形作られているからではないかという仮説を、というよりそれ以前の憶測を、美術史家の著作に示唆を得て提起しておいた。チャールストンにおける旧市街とそれを模したニューアーバニズムの街の比較研究も、この憶測に合致するものと見なされた。その際、ニューアーバニズムは(そのイギリスにおける対応物であるニューアーバンシティや日本でのコンパクトシティを含めて)、「進化的適応環境に由来する景観の好みに近づけて無意識裏に形作られ」の「無意識裏」を、「意識的」にする試みとも解釈できるわけである。

けれどもここで、自然ではなく都市にある重要な要素に注意を向けることになった。それが歴史性である。無論、自然にも歴史はあるが、年々歳々花相似たりで、不変の反復性を基本とする。これに対して都市環境には、一回きりの歴史性の堆積がある。この歴史性を明らかにするための方法と

して現象学は、研究参加者＝居住者の一人称的視点に立った記述と描写のデータを用いるという単なる研究方法の域を超える。前章での想定上の過去のよみがえりの議論は、「現象」としての環境を体験世界の構造として把握し直すという、まったく異なるアプローチの可能性を示唆しているのである。

すでに環境世界把握の方法としての現象学的アプローチは、建築、都市計画、地理学、そして環境心理学へも導入されてきている。枚数の都合でそれらの概観は、心理学サイドから比較的接近しやすく書かれた Seamon(1982)の著作に譲り、ここでは、前章で提起された現象学的方法が3章までの進化心理学的理論にとってどのような意味を持つのかの考察を導きの糸として、両者の関係の可能性を一考することにとどめよう。

まず、歴史的建造物が想像上の過去を甦らせるという前章の件から、考察を始めよう。第3章でみたようにカプランらの理論では、歴史的建造物は、「ひろがり」を時間的方向へと拡大することで、環境の回復的效果を促進する。しかしカプランらが訴える認知論の説明では、ひろがり「より概念的な水準でも作用する」「過去の時代、過去の環境へと……繋がっているという感覚を促進する」とされているのみで、どのように作用するかがはっきりしない。この点、現象学は「志向性」という考え方を導入することで、この作用を体験世界そのものの構造として解明する可能性を開いている(Seamon, 1982, 124ff 参照)。現象学の祖、フッサール(1967)によると、体験世界の時間的構造とは、私たちは想起において過去を志向し、知覚において現在を志向し、予期において未来を志向するところにある。故郷の町に帰った人は、至るところに過去を想起する建物や路地を見る。それらの建物や路地が解発するイメージは単なる空想ではなく、「想起」として過去を志向する。

それが、故郷の風景が促す時間的ひろがりということである。自ら体験したことのない遠い過去の歴史に由来する建造物の場合でも、そこで解発されるイメージが虚構を指示する空想でなく過去の歴史を指示するがゆえに、志向性は体験世界を過去へと時間的に拡大する¹³。志向性はまた、予期を通して体験世界を未来へと拡大する。景観における「ミステリー」の要素、「地平線で視界から消えるような曲がった道」の魅力もまた、体験世界が未来へと志向的に拡大されることとして、その魅力が現象学的に再解釈されることになる。

景観の魅力を現象学的に再解釈するためには、志向的時間性を導入するだけでなく、時空間的体験世界全体の現象学的考察から出発しなければならない。英語文献には一切出ていないゆえにあえてここで紹介するボルノウ（1978）の優れた現象学的空間論によれば、幾何学的物理学的空間が等質なのに対して、体験空間は異方性を備える。前方に続く道は未来を、背後は過去を示す。両脇の空間は仲間の居場所であり、上方は天使等が顕現する超越的方向、下の地面は世界の基盤であって失うと奈落に墜落してしまう。しかもこの体験空間には座標原点がある。この、いわばゼロ点は現在知覚的には私の身体であるが、たえず移動する私の身体が暗黙裡に参照して夕べには戻って行かねばならないとする世界の座標原点が、「住居」（p.57）である。住居はまた、「世界のなかの巣である」（p.127）。「子どものなかには、自分自身は隠れたままで、そこから自分のまわりの世界を気づかれずに観察しうる隠れ場所を求めようとする欲求がいかに深く根づいているか」（p.151）。住

居といっても仮住まいと思っている人も多いかもしれない。そんな人にも、世界の真のゼロ点であるふるさとがある。故郷を出て定住することもなく、一生をさすらい続ける故郷喪失者も中にはいるかもしれない。そのようなさすらい人は、この世には存在しないかもしれない真の故郷、「永遠のふるさと」（p.57）、つまり、宇宙の真のゼロ点を求めているのである。

このような現象学的空間論からすれば、これまでの進化心理学的景観論の再解釈の余地は少なくない。逆に現象学的景観論を進化論的に再解釈することもできよう。そもそも空間の異方性も、「巣」としての住居も、子どもにも著しい「眺望-隠れ場」的な居場所への欲求も、「なぜ」という究極因を求めれば、私たちが二足歩行する視覚優位の霊長類で、サバンナを遠い故郷としているという、進化生物学上の事実由来と言わざるをえなくなってしまうだろう。空想を逞しくすれば、ロマン主義文学の題材としてしばしば取り上げられてきた漂泊の魂が探し求めてきた「永遠のふるさと」とは、サバンナの眺望-隠れ場の風景のことではなかったのか、とも思われてくる¹⁴。

景観論における進化心理学と現象学との二つのアプローチの間には、あるいは補完し合いあるいは再解釈し合って、意外に多くの収斂点が見出されよう。

結 語

第1章でも強調したように、自然環境、都市環境とは物理的実在ではなく、その中で生きている

13 志向性は分りにくい概念であるが、直接経験されているAを直接経験されていないBとして経験するという意識の作用、として説明できる。チャールストンの家の階段を南北戦争時代の兵士が昇降した階段として経験するのも、志向性の働きである（渡辺、2014、p.70ff 参照）。

14 空想の域にとどまるのではなく、実証的な研究に持ち込むことも不可能ではない。たとえば、漂泊癖のある人のグループと定着的な人のグループに、3節で紹介した Balling & Falk (1982) に基づく画像提示実験を行い、漂泊群の方がサバンナ画像に対する好みにより強く現れるか否かを見るのである。

私たち主体に対して現れる現象なのであった。したがって環境世界とは幾何学的物理学的時空間のような等質の時空間なのではない。体験世界としての環境世界と幾何学的物理学的時空間とを同一視できないことは、現象学的環境心理学の淵源の一つとされるフォン・ユクスキュル以来、メルロ＝ポンティやボルノウのような現象学者によってくりかえし強調されてきたところである。そのような流れを踏まえれば、伝統を軽視し直線的幾何学的形態を基本として都市景観を一新しようとしたモダニズムは、幾何学的物理学的時空間と環境世界とを取り違え、生態系の一部として生きる生物としての人間の在り方にも眼を塞ぐことによって、景観破壊、環境破壊の一因となったと言わざるをえないのである。

本稿のテーマに戻るならば、よい景観はなぜ良いのかという景観心理学の根本の問いに対して、進化論的アプローチに立つアップルトンの眺望－隠れ場理論と、カプランらの好みのマトリックスなどの諸理論が導入された。また景観の良さの経験を支える心理学的メカニズムとしては魅了やひろがりに基づく回復効果の存在が示された。次に自然景観だけでなく都市景観に関してもこれらの理論が適用可能であることが示唆された。けれども後者には前者にはない歴史性という要素が指摘され、体験世界の構造を志向性によって把握する現象学的アプローチが有効として導入された。しかも、景観研究におけるこの二つのアプローチの相互補完性は決して偶然ではない。景観がその一面である環境世界が主体に対して現れる現象である以上、体験という現象について多くの知見を積み重ねてきた現象学が有効なのは当然であろう。また、現象学が対象とする体験構造自体、長い進化の産物であると考えられる以上、「なぜこのように体験が構造化されているのか」、本稿のテーマに沿って言えば「美しい景色はなぜ美しいの

か」、という問いへの究極因に関しては、進化論に依るところが大きいのも肯けるところである。

こうしてみると、二つのアプローチの相補性は、景観研究や環境心理学の域を超えて、人間科学一般に拡張できそうな気がしてくる。けれども進化心理学的アプローチの問題点は、都市の歴史性や個人の思い出の場合のように、生物進化から見てタイムスパンが短すぎる場合はしばしば適用困難になるところにある。そのような場合、現象学が協働するのはむしろ、記憶の認知科学ということになるだろう。ただし、記憶のメカニズム自体が進化の産物であることを思えば、現象学と広義での進化生物学的アプローチとは、やはり協働関係にあると思われてくるが、それらの考察は本稿の範囲を超える。

文 献

- 安彦一恵 (2004) 「「良い景観」とは何か」松原隆一郎・荒山正彦・佐藤健二・若林幹夫・安彦一恵『〈景観〉を再考する』(pp.217-256) 青弓社.
- アップルトン (2005) 『風景の経験』(菅野弘久訳、法政大学出版局 (Appleton, J. (1996). *The Experience of Landscape*. London: John Willey & Sons.)
- Balling, J.D., & Falk, J. H (1982), Development of visual preference for natural environments. *Environment and Behavior*, 14, 5-28.
- Barknow, J.H., Kosmides, L., & Tooby, J. (Eds.) (1992). *Adapted Mind: Evolutionary Psychology and the Generation of Culture*. Oxford University Press.
- Bell, P.A., Greene, T.C., Fisher, J. D., & Baum, A. (Eds.) (2001). *Environmental Psychology*, 5th

- ed. Harcourt College Publishers.
- ボルノウ (1978) 『人間と空間』 大塚恵一他訳, せりか書房 (Bollnow, O.F.(1963). *Mensch und Raum*. Stuttgart: W. Kohlhammer GmbH.)
- ブラウン, D. E. (2002) 『ヒューマン・ユニヴァーサルズ』 鈴木光太郎訳, 新曜社 (Brown, D. E. (1991). *Human Universals*. McGraw Hill.
- Buss, D. M. (1995). Evolutionary psychology: A new paradigm for psychological science. *Psychological Inquiry*, 6, 1-30.
- カートライト (2005) 『進化心理学入門』 鈴木光太郎・河野和明訳, 新曜社 (Cartwright, J.H. (2001). *Evolutionary Explanations of Human Behaviour*. Routledge.)
- Cunningham, W. P., & Cunningham, M.A. (2004). *Principles of Environmental Science: Inquiry and Applications, 2nd ed.*. McGraw Hill.
- de Kort, Y. A. W., Meijnders, A. L., Sponselee, A. A. G., & Ijsselsteijn, W. A. (2006). What's wrong with virtual trees? Restoring from stress in a mediated environment. *Journal of Environmental Psychology*, 26, 309-320.
- Flouri, E., Midouhas, E. & Joshi, H. (2014). The role of urban neighbourhood green space in children's emotional and behavioural resilience. *Journal of Environmental Psychology*, 40, 179-186.
- Hartmann, P., & Apaolaza-Ibañez, V., (2010). Beyond savanna: An evolutionary and environmental psychology approach to behavioral effects of nature scenery in green advertising. *Journal of Environmental Psychology*, 30, 119-128.
- フッサール (1967) 『内的時間意識の現象学』 立松弘孝訳, みすず書房 (Husserl, E. (1928). *Zur Phänomenologie des Inneren* Zeitbewusstseins. In *Band IX, Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung*) .
- 五十嵐太郎 (2006) 『美しい都市・醜い都市 現代景観論』 中央公論社.
- Ikemi, M. (2005). The effects of mystery on preference for residential facades. *Journal of Environmental Psychology*, 25, 167-173.
- Kaplan, R. & Kaplan, S. (1989). *The experience of nature: A psychological perspective*. Cambridge University Press.
- Kaplan, S. (1992). Environmental preference in a knowledge-seeking, knowledge-using organism. In J.H.Barknow, L. Kosmides & J. Tooby (Eds), *Adapted Mind: Evolutionary Psychology and the Generation of Culture* (pp. 581-598). Oxford University Press.
- カプラン, R., カプラン, S, ライアン, R. L. (2009) 『自然をデザインするー環境心理学からのアプローチ』 羽生和紀監訳, 誠信書房 (Kaplan, R., Kaplan, S., & Ryan, R. L. (1988). *People in Mind: Design and Management for Everyday Nature*. Washington DC: Island Press.
- Kaplan, S. (1995). The restorative benefits of nature: Toward and integrative framework. *Journal of Environmental Psychology*, 15, 169-182.
- 松永安光 (2005) 『まちづくりの新潮流——コンパクトシティ・ニューアーバニズム・アーバンビレッジ』 彰国社.
- メルロ＝ポンティ, M. (1982) 『知覚の現象学』 中島盛夫 (訳) 法政大学出版局 (Merleau-Ponty, M. (1945). *Phénoménologie de la perception*. Paris : Gallimard.)
- レルフ (1999) 『都市景観の20世紀』 高野岳彦・神谷浩夫・岩瀬寛之訳, 筑摩書房 (Relph, E. (1987). *The Modern Urban Landscape*.

- Routledge.)
- Revonsuo, A. (2000). The reinterpretation of dreams: an evolutionary hypothesis of the function of dreaming. *Behavioral and Brain Science*, 23 (6), 877-917.
- 佐野敬彦 (2008) 『ヨーロッパの都市はなぜ美しいのか』 平凡社.
- Scopelliti, M., Carrus, G. & Bonnes, M. (2012). Natural landscape. In S. Clayton (Ed.), *The Oxford Handbook of Environmental and Conservation Psychology* (pp. 332-347). Oxford University Press.
- Seamon, D. (1982). The phenomenological contribution to environmental psychology. *Journal of Environmental Psychology*, 2, 119-140.
- Stamps, A. E. (2004). Mystery, complexity, legibility and coherence: A meta-analysis. *Journal of Environmental Psychology*, 24, 1-16.
- ユクスキュル, クリサード (2005) 『生物から見た世界』 日高敏隆・羽田節子訳, 岩波書店 (Uexküll, J.v., & Kriszat, G. (1934). *Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen*. Springer.
- Ulrich, R. S. (1983a). View through a window may influence recovery from surgery. *Science*, 224, 420-421.
- Ulrich, R. S. (1983b). Aesthetic and affective response to natural environment. In I. Altman & J. F. Wohwill (Eds.), *Behavior and natural environment* (Vol.6, pp. 85-125), NY: Plenum.
- Ulrich, R. S., Simons, R. S., Losito, B. D., Fiorito, E. Miles, M. A., & Zelson, M. (1991). Stress recovery during exposure to natural and urban environments. *Journal of Environmental Psychology*, 11, 201-230.
- 渡辺恒夫 (2009) 環境科学の科学基礎論 科学基礎論研究, 37, 49-58.
- 渡辺恒夫 (2014) 『他者問題で解く心の科学史』 北大路書房.
- Watanabe, T., Kawano, K., Kokubo, H., & Takazawa, K. (2008). Psychophysiological changes during exposure to natural and urban environment. *Journal of International Society of Life Information Science*, 26/1, 106-111.
- Wells, J. C., Baldwin, E. (2012). Historic preservation, significance, and age value: A comparative phenomenology of historic Charleston and nearby new-urbanist community of l'On. *Journal of Environmental Psychology*, 32, 384-400.